

ら感じられた。しかし、彼女ははじめから家族と教員や相談員が会うことを怖がっていた。そこで、初めはできる限り接触はとらず、彼女と信頼関係を作っていくことに重心を置いた。その上で、少しずつ何を親と話したいとSSWr.が思っているか、また、SSWr.に伝えてほしいことがあれば彼女の話を書くという準備を彼女と共にしてから親と会うことになっていった。それは、彼女との関係が終結するまで変わらなかったが、少しずつ彼女の拒絶反応は少なくなっていったように思う。彼女の話だけを聞いているとどんなにひどい親なのだろうかとさえ思ってしまうこともあったが、母親に会って、SSWr.自身安心することが多々あった。お互いを伝え合うことで、親の置かれている状況をSSWr.自身少しずつ理解し、共に彼女を応援していこうと話しが出来ていったことは彼女にとってもSSWr.にとっても意味深いことであったように思う。しかし、だからといって、彼女が思うようには親は変わらなかったように思う。SSWr.の働きも彼女にとっては十分でなかったのかもしれない。だからこそ、最後まで多かれ少なかれ彼女は親との関係の葛藤に悩んだ。

いよいよ、進路を模索する時期が来た。高校へは進学したいという気持ちが強かったので、SSWr.の方では、全日制・定時制・通信制・サポート校など、学校を休みがちな子どもの前に開かれている高等学校の卒業資格が得られる様々なシステムを説明したり、新しい試みがなされている学校の情報などを彼女の状態や様子を見ながら伝えていった。最後の最後まで家族や担任とよく相談しながら動いていく（いけるようになった）彼女の姿を応援した。

G. 全体の考察・課題

困難さを抱えた子ども自身を、そして家族というものをどのように理解していくのか。このことが本当に難しく、最後まで彼女自身への支援・家族の関係・親子関係の調整をどのようにして図っていったらいいのか、SSWr.自身を揺るがしていたことのように思われる。親子の中で取り交わされる言葉や行動は第3者にはわからない・理解しがたい特別な意味や余韻を含むことがある。子どもの、そしてその家族にとっての困難な状況とその意味をそれまでの家族の歴史を通して、互いに確認しあう中で、やっと理解できることがある。彼女の家庭の場合、親子それぞれのお話を聞けば聞くほど、親子の間の方向性・求めるものの違いはあるものの、互いを理解していきたいという思いにずれがないようにSSWr.には感じられ、SSWr.としては、成長(自分の存在を肯定し、少しでも自分に自信を持ち、他者の在り方にも関心や理解をもてるような状態への成長)していく彼女を待つことに支援の中心を置いていった。そして、事実、彼女の成長は目を見張るものであった。しかし、私自身がそして、SSWr.が困難さを抱えている人をどのように理解していくかということは、支援をする上で最も大切なことのように思われ、これらを専門職

としてどのように考え・身につけていくかということは大きな課題のように思われる。

また、学校の中で、異なる専門職が、スタンダードに生きられない(生きない)子どもの支援に当たるということは、足場のないようなところに共に立つような感覚に陥ることも多く、スーパービジョンなど SSWr. 自身が精神の安定を保ち、適切な助言を受けられる場があるかどうか、また学校という職場の中でどれだけ大人同士が互いに自分の言葉で気持ちを伝え合えることができるかどうかで、支援の形・内容が変わってきてしまうことも多々実感し、その風土を SSWr. がいかにつくることに参与できるかどうかということにも心していきたいと感じられた。

彼女と SSWr. の関係は、期間が長かったこともあるのか、不安定なものであった。少しずつ彼女のことを理解でき、つかみかけたかと思うと、するりと抜けられた。全然分からないと思っていると「生まれてきたからにはさ、好きなことをみつけて、自分の生きた証を残していきたい」と出会った当初には考えられないような希望に包まれる自分の想いを教えてくれた。それが、終盤、心身ともに疲れきった彼女の背中に声をかけた私に対し、「ほっといてよ」と静かに重たく彼女が答えたその言葉に、「もうしばらく待っていて。きっと自分の力で浮上してくるからね」という彼女の言葉の隠された本当の意味が少しだけだが聞こえるようになったように感じた。

それを感じさせてくれたのは何であったのだろうか。

彼女の言葉にはならない、色々な思いを聴きたいと、一緒にいられる時間だけをただ大切にした。今、振り返ってみて、彼女の思いを汲んで、SSWr. なりにいろんなストロークを投げかけてきてが、それが彼女にとって有益であったかは正直分からない。ただ、彼女が巣立つ前に残してくれた言葉が SSWr. を励ましてくれる。「相談室にいられて、マジメな人間にさよならを告げた。僕は阿保に生きてゆく」。彼女独特のユーモアを交えながら、新しい自分に出会い、自分らしく生きていく決意をした彼女の姿があった。何かをするということだけでなく、ただ一緒に共にいる。そんな時間が彼女にこんな想いを抱かせることの小さな力になっていたのならこれ以上の喜びはない。

今、彼女は通信制高校(通学タイプ)に通い、友達を作り、勉学に悪戦苦闘し、アルバイトをし、自分の趣味の世界で大きな活躍をしている。

本事例へのコメント (山下英三郎)

事例の記述方式について

現場で実践活動に従事する者に共通する傾向の常として、活動を文章化する経験の不足がある。まして筆者のように、職場内でただ一人しかいないソーシャルワーカーの場合、事例をまとめるための方法や様式について学ぶ同僚やスーパーバイザーもいない。そうし

た限界を抱えつつも、当初は時系列的に記述してもらい、それに対してコメントをし、若干やりとりをした後、他職場で用いられている事例記述用のフォーマットを示し、それに準拠して執筆を進めるよう助言した。その結果、非常に読みやすく活動内容がまとめられたと思う。

事例について

本事例は、わが国のソーシャルワーク実践領域としてはまだ確立されていない、学校における活動報告である。そういった意味では、非常に貴重な実践報告であるといえる。

筆者は、某私立校に非常勤のソーシャルワーカーとして日々生徒たちが抱える問題に対応している。そうした子どもたちとの関わり合いの中から、一人の生徒の事例について述べている（プライバシーに十分に配慮し述べられていることはいまでもない）。

学校内における相談業務には、すでに教育相談や90年代の後半から急速に導入化が進行しているスクールカウンセラーなど既存のシステムがあり、それらの体制を整えることによって生徒支援対策は完結したかのような観がある。そうした状況に対して、ソーシャルワーカーの関与の必要性や独自性、さらには効用性などをいかに実証するかという課題がある。

筆者は、私立の中高等学校で活動する機会をえているのであるが、ソーシャルワーカーとしてさまざまな機会をとらえ実践を試みていることが事例を通して窺える。ひとりの生徒との出会いを通して、ニーズ把握の難しさを感じつつも、決して突き放すこともせず、かといって過剰に関与することもせず、一定の距離を保ちつつ、相手の必要に応じて援助のための行動をとる。こうしたことは、言葉にすれば簡単なことのように思えるが、実際にクライアントと向かい合う場面では、なかなかできることではない。まして、毎日のように接触を続ける関係においてはなおさらのことである。

ソーシャルワークにおける実践が、援助技術を駆使してクライアントの問題解決を図ることだけではなく、個々人が有する能力を発揮できるまで、あるいは発揮できるような条件作りをすることも重要であるということをよく理解して現場に臨んでいることが分かる。担任や養護教諭との仲介や調整など、学校内での役割に活動を限定することなく、卒業生を資源として活用したり、民間のフリースペースの紹介、さらには家族との接触、進路先の情報提供などを行うことによって、クライアントの可能性を発揮できる場を模索することなどは、ソーシャルワークの機能からして、当たり前のことのように思われる。しかし、学校という閉ざされた空間においては、「学校の恥」を外部に曝すことは好まれないものである。それを実現するまでには、相当の軋轢もあったことが推測される。

同時に、ワーカーであれ、カウンセラーであれ対人援助職に就いている者は、利用者との信頼関係を構築することにエネルギーを傾注し、関係ができた後も、その関係を維持することに腐心し、第三者への関係へと広げることを忘れがちである。だが、本事例では、ワーカーは、比較的早い段階から周囲との関係を視野に入れて活動を行っている。これら

は、自らの限界を踏まえ、かつクライアントの最善の利益を考慮して、支援の選択肢から方法を決定したものであると思われるが、そのオープンさもソーシャルワークの機能をよく理解しているところから引きだされたものであろう。

ここで述べられた事例は、順調にことが運んだ成功例ではない。ワーカーは、終結後も自らの介入については確信を持ってないことを吐露している。葛藤を抱えた他者を支援する過程では、すべてのことに自身を抱き判断を下しながら、援助をすることなど至難のことである。生きている存在は、毎日煉瓦を積み重ねるように解決へ向かって歩みを重ねるものではない。積み上げたと思った信頼関係や、安定したと判断した精神状態などは脆くて、何かのきっかけで崩れ落ちてしまうことが少なくない。

そうしたことを念頭におくならば、筆者の自分の援助に対する不確かな気持ちは、むしろソーシャルワーカーとして健全な姿であるように思う。過剰な関与をすることなく、見守る姿勢を保ち、クライアントが相談室を居場所として利用することを保証し続けた判断は、クライアント自身の言葉の中に回答がある。このような援助の形もあるのだという、ひとつの事例である。

<資料2>

日本社会事業大学・社会事業研究所セミナー 記録

講演&ワークショップ ソーシャルワーク実践をつくる

○第1日 2004年11月6日(土)

第I部 講演「ソーシャルワーク実践の核心は何か？

そしてその獲得の課題は？」

渡部律子氏(関西学院大学教授)

第II部 シンポジウム「ソーシャルワーク実践への私の取り組み」

○第2日 2004年11月7日(日)

ワークショップ・分野別実践事例検討会

- | | |
|-------------|---|
| {分野} 1. 高齢者 | SV: 奥川幸子氏(対人援助職トレーナー) |
| | SV: 渡部律子氏(関西学院大学教授) |
| 2. 精神障害者 | SV: 寺谷隆子氏(本学教授・JHC板橋会理事長) |
| 3. 児童 | SV: 山下英三郎氏(本学研究所助教授
・日本スクールソーシャルワーク協会会長) |
| 4. 医療福祉 | SV: 小嶋章吾氏(国際医療福祉大学助教授) |
| 5. ケアマネジメント | SV: 手島陸久氏(本学教授) |

渡部律子先生講演

ソーシャルワーク実践の核心は何か？

そしてその獲得の課題は？

はじめに

関西学院大学の渡部でございます。今日、私は「ソーシャルワーク実践の核心は何か？その獲得の課題は？」という非常に大きなテーマをちょうだいしました。今日の講演で、もし、ここに来られた皆さんが実践の核心をつかみ、獲得の課題の解決法を分かって帰ろうとお思いでしたら、申し訳ございません、最初からすみませんが、簡単な明快な答えは出すことはできません。

ただ、実践と教育活動、それから実習担当の教員を含めまして私がかれこれもう 30 年弱ソーシャルワークにかかわってきたプロセスで常に、「ソーシャルワークの実践っていったい何？」ということと、「いったいどうしたら私は少しでもいい実践家になれるの？」ということを考えて続けてきました。ですから、私がたどってきたプロセスを今日お話ししながら、皆様方と共にどこかにあるらしい実践の核心と、獲得の課題に対してどんなアプローチができるのだろうかということ、私の試行錯誤を交えたプロセスから聞いていただくことで本日の講演にしたいと思っています。

第2部のシンポジウムは「ソーシャルワーク実践への私の取り組み」となっています。しかし、実際はこの第1部の講演もソーシャ

ルワーク実践への私の取り組みプラスアルファと思って聞いていただけるとうれしく思います。

今日このような演題をいただきまして、どこに焦点を当ててお話ししたらいいのか、ちょっと悩みました。私自身は先程申し上げましたように、30年弱経過をしています。その中で皆様方の経験と合致する部分と、逆に「もうそんなのは、私は済んでしまったわ」と思われる部分、また、「私はそこにまだ行っていない」という部分、いろいろあると思いますが、私の最後に行き着いたところが、基本、基本、基本、基礎、基礎、基礎。結局は、初心者の方であっても上級の方であっても、最終に戻らなければいけないのは基礎の部分だということに到達しました。

ですから、皆さんの中で、これから話すことが「私はもうそういうところは済んじゃった」という方は、その中から皆さんと共有できる部分を見つけていただきたい。「私はまだそこには行っていない」という方も疑似体験で結構ですので、私がお話している場にいればどんなふうになっていくかを考えながら聞いていただければありがたいと思います。

まず、本日私がお話ししたいと思ったことは、先程申し上げましたように、自分自身のこれまでの30年弱のプロセスを皆さんにお話することで、そこで見つけ出した、ソーシャルワーカーとして私たちが力を着けてい

くためには、いったいどんなことができるのか、それを阻む問題というのはどんなものなのか、それに対応するのはどんな方法があるのかということなのです。

ですから、簡単に私自身の過去に戻ります。この間に私自身が実践家、そして教育者としてたどってきた道筋をお話して、その中から今のようなことをお話ししていきたいと思っています。私の歴史だけを聞いて1時間半終わってもとてもつまりませんので、そこから私が学んだこと、若しくはその過程でこれが課題の解決に使えるかもしれないと思う資料や本、若しくは考え方などもご紹介していきます。

私の歴史というときに、簡単に四つに分けてお話ししたいと思います。まず私自身が本当に大学の実習生として初めて現場に出て、5年間日本で実践を致しました。その間の悩みや迷い。

2番目は、そのあと私は1982年にもう30歳を目前にしてアメリカにもう一度学ぶために留学しました。そのアメリカ留学の中で、主に本や講義、実習生として学んだこと、そこでどんなことを学んだかということ。

そして3番目は、私はアメリカで通算4年ちょっと教員として教えて参りました。ソーシャルワーカーになる修士の課程の学生を対象にしていたのですが、その中で私が考え出した教え方、これは私だけが考えたことではなくて、皆さんと一緒に編み出した教え方、若しくはそこで見つけた何らかの自分でできる勉強の方法や、私たちのような仕事をする人間がする学習の仕方に関する知識や理論。

4番目には現在です。日本に10年前に戻って参りました。その後、研修などを通して、今は実践家の方たちとのかかわりを持たせていただいています。その間に私自身がアメリカで学んできたこと、過去日本で実践したことを現在の日本でどんなかたちで使っているか、若しくは使えたか。私がいつも出会わせ

ていただく現場の方たちがどんなかたちで研鑽し、自分の研鑽をしていらっしゃるかをお話ししていきたいと思っています。

1. はじめての現場

—日本での実践—

最初、私は初心者としての私の話をすると言いました。ここでは私の歴史をたどるよりも、あるエピソードを聞いていただくのが一番いいかと思っています。このエピソードは実は日本のエピソードではなくアメリカのことなのですが、私が日本で初めて実習をした時と本当に重複するものがありますので、そのことを話したいと思います。

私自身まず実習をしたのがどんな所かといいますと、それをソーシャルワークと呼んでよいのかどうか疑問が残るのですが、私が大学4年の時に実習生として、ある小学校に併設されていた情緒障害児学級に行きました。そこで行われていた、当時遊戯療法と言われましたプレイセラピーの片隅に私もいさせていただくという条件で、週に1回実習を始めました。

私は関西学院大学を出ておまして、早くから実習制度がありました。それは1年間を通して週に1回1日、4年次に参ります。私が行ったのは学校教育の機関であって、働いていらっしゃる方は実習生以外みな学校の先生でした。私自身その当時はいろいろと夢がありまして、私は実習に行ったら、絶対に何か大きな変化を、対象になるお子さんたちにもたらしたい。そんなことを思うのがおこがましいのは今とてもよく分かるのですが、そんな夢を持っていました。

ところが実習に行きますと、来る日も来る日も私の担当のお子さんは砂をまくことをやります。情動行為と言われているのですが、

毎日毎日砂をまいて、私は砂だらけ、プレイルームは砂だらけ。夕方4時半になりますと皆さん帰ります。砂にまみれたプレイルームの掃除をしながら、毎週涙が出そうでした。私は何のためにここに来たのだろう。私は何をするためにこの仕事をするのだろう。ゴールは何？

ソーシャルワーカーの役割とは何か；米国の実習学生のエピソードから

「ゴールは何？」と、そんな格好いいことは思わなかったのですが、何が目的で来ているのか。このお子さんやこのお母さんたちに、いったい私は何を提供できるのか。何か提供できるようなものを私が持っているのか。考え出すととても悲しい思いでした。このような私のエピソードと全く重なるエピソードが、私がアメリカで教鞭を執った時にございました。これはアメリカの大学院の学生の授業をした時だったのですが、そのお話をしたいと思います。

シカゴでの話です。私が担当した学生は、皆さんはお聞きになるときっとよくご存じの、非常に有名な精神障害者の方たちの機関に実習に行っていました。二十数人の小さなクラス、日本で言えば多分「ソーシャルワークの実践」という入門のクラスだったと思います。私は当時それに相当するクラスの担当で、授業でどんなことをするかというと、面接のテクニックも教えるし、ソーシャルワーカーがどんな仕事をするかという非常に広範な領域のことも教えます。その中ではいろいろなアプローチも教える。ですから、学生たちはもうこの技術が外に行っていつ使えるか、いつ面接できるかととても楽しみにして出ていくわけです。

そうこうして授業が始まって、彼女も実習に行き出して3カ月ぐらいたった日のことでした。この人の名前を仮にエミリーとします。

エミリーさんは24、5のきれいなお嬢さんでした。彼女が私の研究室を訪ねてきました。それで、こう言われました。アメリカでは先生と言ってくれないので「律子」と呼びます。

「律子、私はあなたの授業で習ったようなことを実習では何もしていない。私がやっているのは大人のベビーシッターだ」と言いました。

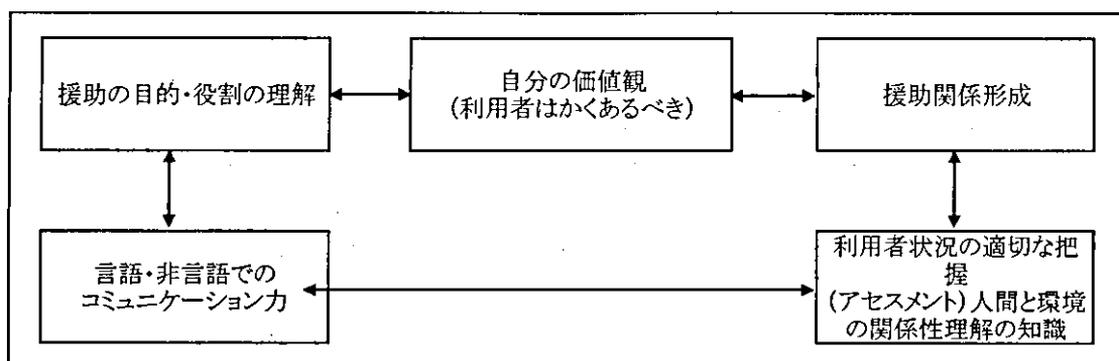
そこでエミリーさんに「いったいあなたはどんなことをしているの」と尋ねました。すると、彼女が少しずつ自分の担当の方、それから自分に課せられた役割のことを話してくれました。彼女が担当していた男性は、自立生活を始めてまだそれほど月日のたたない、30になろうかとしている方でした。低所得者の方たちがお暮らしになるアパートに住んでいました。

つい最近がんが見つかり、がん治療に通っておられます。エミリーさんは実習先の先生に、「あなたはあの方のがん治療に付いていきなさい。車で送り迎えをし、彼が待合室で待っているときに一緒に待っているのが仕事だ」と言われました。

もし皆さんが実習生としてこのように言われたら、自分が何のためにソーシャルワークの学校に来てソーシャルワークをするのか、初心者であれば悩んだらうと思います。彼女もそれだけしか聞かされなかったので、そうやって3カ月が済んだのです。それで気が付いてみると、何もしていない自分。それで「律子、どうなっているんだ。あんたが教えていることと全然違うじゃないか」というのですごい勢いで駆け込んできました。

「ソーシャルワーカーとして習得しなければならない基本的知識と技術」として、ソーシャルワーカーの役割、ソーシャルワークの目的、何のためにするか。それから倫理、どんなふうな倫理に基づいて仕事をするか。人を理解するときには常識ではなく、私たちが専門職として何を基にしてその方たちを考える

図表1 ソーシャルワーク実践に必要な知識や技術の相互関連性



か。そして、それらをすべて入れて、実際に目の前にいらっしゃる方とどんなかたちで対話をし、その方が今持っていられる課題にぶつかっていくか。それを行うのが相談援助面接というものです。

これらをどんな関係性があるかということを図表にしてみました(図表1)。これら五つの円があるのですが、これを皆さんに見ただいて、このエミリーさんのお話をしたいと思います。

彼女はまず、自分は何のためにその男性の所に行っているか、援助の目的、そして自分の役割が分かりませんでした。それから第2番目は、彼女はこう思いました。その男性のおうちに行って、彼女がこんなふう思っていたらいいのです。「私がもっと積極的に問いかけて面接をして、『あなたは何かで困っているの。私が何かできない? どうすればあなたはより良くなる?』ということを知りたいかった」。

彼女が持っている価値観とといいますか、その年齢の男性に対してかかあるべきということが、彼女と彼のやり取りの中で大きな影響を与えていました。彼女と彼の中には完全に援助関係と呼ばれる何らかの関係が出てきません。その関係を彼女自身まだつかみ切れませんでした。

「彼は私が行っている間、ほとんどしゃべ

らないんです。ずっと黙っています。言語や非言語でのコミュニケーション、私が使いたいと思っていた言葉でのコミュニケーション力がソーシャルワーカーとして発揮できない」と彼女は言いました。そして、利用者の状況の適切な把握、これを「アセスメント」と呼んでいますが、これを彼女は彼との対応の中で行わなければならなかったのですが、その時点で彼女が行っていたのは、「何もしていない。私は大人のベビーシッターをしているのだ」ということでした。

では、本当に彼女は何かしていなかったのか。そして、彼女のやっていることはソーシャルワークではなく、大人のベビーシッターだったのか。私と彼女がやったことはこんなふうでした。私が彼女にいろいろなことを尋ねました。皆さんがソーシャルワーカーとして仕事をするとき、クライアントの方からその方の今置かれている状況を聞かせてもらってアセスメントするのと同じように、私も彼女が置かれている状況が全然分かりませんでした。「私は大人のベビーシッターなの」「ふーん、そう」という感じです。ですから、「もう少し教えてください」と言って尋ねていきます。

それで、「あなたが週1回彼の所に行ったら、彼はどんなふうにしてあなたを迎えてくれるのか」、まずそんな話から始まりました。

あとは言葉の問題もありまして、私もよく分からないので、「私があなたになって『こんにちは』と入ってみるから、その入り方を教えて。それで、あなたは彼になってみて」と言っただけで、これはロールプレイと言われるのですけれども、2人でロールプレイをしました。

すると、とても面白かったのは、私が「こんにちは、エミリーです」と入ったら、彼女は椅子に座ってうなだれた姿勢を取るのです。脚を貧乏揺すりと言われるのをずっとします。私は分からなかったので、「今やっているのは、あなたが行ったときにその方がやっていること？」と聞いたら「そうなんです。私が行くと、いつもこういうふうに、あまりしゃべりたくなさそうに貧乏揺すりをしているんです」と言いました。

それで、私が次に彼女に「じゃ、あなたは今そこに座って、下のほうを向いて貧乏揺すりしながら何を考えてる？」と言ったら、「嫌だな」と言いました。知らない人がやって来て、とても嫌だ、窮屈だ。それで、「そう。じゃ、あなたは今、彼の気持ちが分かったんだよね。それから何をやるの」と言ったら、最初は、普通少し会話をするのだそうです。少し会話をしてから、彼女が車に乗って病院に行く。病院で彼が治療までの時間一緒に待っている。「その間どうしてるの？」と言ったら、「やはり同じように貧乏揺すりしている。すごく不安そう。自分がやってみると、やはりすごく不安だ」と言いました。

次は帰りです。車に乗って一緒に帰ってきます。そして、その住宅のアパート、駐車場がアパートから少し離れています。そこに来て、車を降りて2人でおうちに行き、また少しだけ話をし帰ってくるそうです。「あなたはどうするの」と言ったら、「私はそこで、大体帰ってきてからはお茶を入れて、2人でお茶を飲むの」という話でした。

こうやって話していると、彼女は賢い人です。私からだんだん気が付いてきました。「私は

何もしていないと言ったけれども、ひょっとしたら何か役割があるのかもしれない」。彼がこれまでどんな暮らしをしていたかを2人で話し合いました。今まで外部の人とのかかわりをほとんど作ることができなかった彼。ましてや妙齢のきれいなお嬢さんです。24、5のお嬢さんが30になろうか、ちょっと出たぐらいの男性のおうちに行くのです。一緒にいるだけでも、普通でもどきどきものです。彼女はだんだんそれが分かってきます。

彼は自分でこうやって生活してまだ日が浅い。ということは、「私が行くだけでも彼にとってはすごい負担よね」と分かっていきます。「じゃ、彼が私とこうやって時間を過ごすということは、彼にとってひょっとしたら意味のあることなのかもしれないですよ」とも言い出します。

すると何が起こったかということ、彼女が援助の目的、役割を理解し始めたということだったのです。先程私は自分自身実習生として仕事を始めた時、分からなかったと言いました。私にはすごいゴールがあったのです。このお子さんが1年後にはべらべらとしゃべって、ほかのお子さんと全く変わりのないやり取りを私とする。そんな起こりもしないことを思っていました。

彼女も彼に対してすごい期待を持っていたのです。私が行ったら、そこで「エミリー、こういうことで君に相談をしたいんだが」と言って、私たちが習っていたようなクライアントの役割を執ってくれると思っていました。違いました。援助の目的、役割が彼女に少しずつ理解できました。

以下にソーシャルワーカーの役割を書き出しました(図表2)。

これは私が考えたことではなく、ソーシャルワークの教科書を書いた人たちが大体持ち出してくる役割です。ソーシャルワーカーは皆さんが経験しているように、本当にいろいろなことをします。働く領域で随分と役割が

図表2 ソーシャルワーカーの役割

1. 心理社会的カウンセラー、セラピスト
2. ブローカー（クライアントとサービスの有効な結びつきの促進）
3. ネットワーカー（システムとソーシャルワーカー、クライアントと資源間での共同作業の向上）
4. ミディエーター（利害の衝突するシステム間に介在し、違いを建設的に解決）
5. エネブラー（クライアントや支援対象の長所を発見し、それを相手が認識できるようにフィードバックして伝える。これにより利用可能な資源を活用できるようにする。情報提供も含む）
6. 教育者（クライアントが技術を伸ばし、情報や知識を得ることを推進、クライアントの向上の機会提供）
7. アドボケート（代弁者）
8. 評価者
9. モービライザー（グループ作り、活性化）
10. コンサルタント
11. コミュニティプランナー
12. データマネジャー
13. アドミニストレーター
14. ケアギバー

違います。まさにこのことでした。エミリーさんは心理社会的カウンセラーをしたい、カウンセラーというものが彼女の頭の中にあっただソーシャルワーカーの役割だったのです。「セラピストしたい、治療したい」と思っていました。

ところが、彼女が実際に必要とされていたのは何かというと、5番目にありますエネブラーです。エネブルとは何かができるという意味です。クライアントや支援対象の長所を発見し、それを相手が認識できるようにフィードバックして伝える。フィードバックというのは何も言葉だけではありません。そこに一緒にいてくれるソーシャルワーカーが、自分と一緒にいることを嫌だと思っていないようだ、自分があまり上手にしゃべれないことを苦痛と思っていないようだ、貧乏揺すりしている私を嫌だと思っていない。そうした

非言語のコミュニケーションでも伝わります。これがここです。

そして利用可能な資源を利用できるようにする。資源とは何ぞやというと、この場合人間なのです。彼はそれまでほかの人に「何かして」とか上手になかなか頼んできていません。そんな中でこの一実習生とのかかわりを通して、紅茶を入れてくれる実習生、車に乗って自分の治療先まで行ってくれる実習生。確実に学んでいます。彼女がそれをする事自体がフィードバックになっています。

そして6番目、教育者。教育者というと、上から下にものを教えるように思われるかもしれませんが、実際はそんなにすごいものではないのです。何か新しい技術、新しいことを学ぶのにソーシャルワーカーが役に立つことがあります。エミリーさんは、彼が人と会話をする、人に頼みごとをするとか、逆

に人のおもてなしをするという社会性を実際の生活の中で体験してもらうことで、ある種の教育者としての役割を果たしていたこととなります。

彼女がそれを分かってくると、いろいろなものが変わってきます。何か。自分の価値観。彼女が30ぐらいの男性にこうあってほしいとか、人はこう生きてほしいとか、私たちそれぞれがいろいろな価値観を持っています。ソーシャルワーカーは自分の持っている価値観に左右されますが、その価値観が仕事を邪魔するようになったら気を付けなければなりません。エミリーさんは、自分が思っていた、ある年齢の男性はかくあるべき、若しくは男性でなくてもいいのですが、大体これぐらいの年齢の人はこれぐらいのことができないといけないという自分の思いから少し離れられるようになりました。

すると、援助関係にも変化が起こってきます。エミリーさんが援助関係の変化や自分の価値観に思い至る、援助の目的・役割の理解に至ったのは、一番大きかったのは実はここなのです。利用者の状況の適切な把握。エミリーさんが彼の生い立ち、そして彼が今何で困っているかなどということをはっきりとさせていく過程で、この人に今必要な環境はどんなものなのか。この人と一緒に仕事をしていくときに私が目指せるものは何なのか、何が役に立つかに思い至ります。

すると、言語や非言語での彼女のコミュニケーションも変化していきます。彼女は賢い人だったので、私としばらくしゃべったら「分かった。もういい」と帰ってしまったのです。それからしばらくして、また私の研究室を訪ねてきました。今度はうれしそうなのです。「聞いて、聞いて」という感じでした。きっと彼女は何か新しいことに気が付いたのだらうと思いました。

何かを言ったかという、「律子、彼が私に紅茶を入れてくれた」。3カ月前の彼女であれ

ば、紅茶が1杯入ったぐらいで何の驚きもしませんでした。きっと「何か紅茶が入ったわ」ということです。ところが、新しい枠組みから彼を見た時、今まで自分が紅茶を入れてもてなしていたというのを、今度は彼がおもてなししてくれたというその違いに気が付くことができました。「これはすごい」と彼女は思ったのです。

それからもう一つは、「実はこの間、私が車でがんの治療先から帰ってきて駐車場にいて、エンジンを切って2人でアパートに戻ってこうとした時、彼が『ありがとう』と言ってくれた」。この二つだけなのです。この二つは普通でもうれしいですよ。皆さんがだれかの所に遊びに行くと、紅茶を入れてもらって、「ああ、良かったな」とお茶を出してもらった。「ありがとう」と言ってもらうと、「ありがとう」はうれしいです。

でも、そのうれしさが自分のソーシャルワーカーとしての仕事の中でうれしいと思えたのか、一般的な常識的な人間関係の中でうれしいと思えたのかには雲泥の差があります。エミリーさんは、適切にその人をアセスメントしようという姿勢を持った時に、自分の役割・目的が分かりました。すると、関係性が変化しました。日々起こっている変化がどんな意味を持つのかも分かりました。こうやって仕事の中で彼女が、一般の常識で考えれば何でもないと思う、大人のベビーシッターでしかないとか思われぬことに意味があることを見つけました。

ソーシャルワークの仕事は本当に広範です。彼女が言うような、大人のベビーシッターに一見見えるようなこともあります。非常に難しい。先程一番上に挙げました心理・社会的なカウンセラーやセラピストとしての役割を要求され、そして利用者、クライアントが「それに応えてくれた」というやり取りが行われることもあるのです。

このことをまず、皆さんにお分かりいただ

いて、ここでとても大事なことは何かといたしますと、ソーシャルワーカーとして私たちが自分の仕事を大切に、資質を伸ばしていくときにやはり忘れてはならないのは、基本的な要素です。相手の方をしっかりとアセスメントできる枠組みを持っていること。援助関係を形成するために必要なことは何かを知っていること。このことに関しては、また後で本を紹介したいと思います。

それから人間理解ですが、人間を理解するときには、単にソーシャルワーク、社会福祉の本を読んでいるだけでは終わりません。社会学、心理学、文化人類学、それからたくさんの広範な領域での学習も必要です。皆さんが経験してこられた世界というのはそんなに広くはないはず。私もそうです。私が知っている世界は一つ、二つ、三つぐらいです。

しかし、私たちが会おうクライアントの人たちは、そこにはまらない人たちもたくさんいます。その方たちがどんな環境で暮らし、そして、その環境の中にとどのような考え方をすることができようになるのか。どのような行動がそのような生活の中では普通だと言われるのか。これも学習する必要があります。

このような基本的な学習、これらがすべて加わって、そして最後に出てくるのが相談面接の場面です。単に上手に「はい、はい」とうなずけるだけでは相談面接はできません。そこで、相手の話を聞き、聞いたことをきちんと整理し統合して、相手の人が今抱えている問題にこの情報をどう使えるかと、自分の頭の考えることができなければなりません。そのためにはやはりしっかりと基礎の勉強が必要になります。

今、皆さんにお話ししたかったのはこの基礎の部分です。これは私の最初の歴史の第一歩のところをお話しするために使いました。

私流ソーシャルワーク実践の学び方

私自身は、その自閉症の子供さんと過ごした1年間、ずっと悩んでいました。私の役割は何なのか。どんなふうになればいいのか。どんなアプローチがあるのか。

そののち、子供さんだけではなく親御さんの相談面接、若しくはもう少し年齢の高い思春期から青年期の方たちの相談面接をするようになりましたが、お会いしたときに、まずどうしゃべっていいのか。50分の面接時間が終わったときに、どう終わっていいのか。「次にまた来てください」と言うのか、言わないのか。何を基準にして決めるのか何も分からなかったのです。それは私が不勉強だったことが大いに関係しているとは思いますが、本当に分からなかったのです。だれかの面接が見たい。面接をそのまま記述した文章が見たい。もう切に思いました。

そんな時に私がじたばたして何をしたかという、一つは研修会巡りをしました。かなりお金を使いました。仕事を始めてまだ間もなかったのに給料は安かったのですが、研修会に行きました。自分の中ではその時、つまらない研修とか、こんなのは何も分からなかったというのもありました。

今思ってみると、それらがすべて何らかの意味があったのですが、私には気付かないものもありました。一つはいろいろな研修に行きました。本屋に行って一生懸命本を探しました。今でこそソーシャルワークや社会福祉の援助技術の本はたくさん出ているのですが、当時はほとんどありませんでした。ですから、当時私が探したのはカウンセリングや臨床心理の本でした。そのためにソーシャルワークが何かというのは、私は長いこと分からないままいました。

お金と時間をいっぱい使い、そしてその中でたった一つやってきたことは逐語録を書く

ことでした。逐語録というのは、自分が面接したその記憶をたどって、「渡部 こう言う、その時子供 こう振る舞う、そしたら渡部 こう言う」というのを全部書くのです。すごくつらい、しんどい作業でした。家に帰ったらなかなかやりたくないのです。それで何をしたかという、実習の帰りに必ず喫茶店に行き、2時間コーヒーを飲みました。2時間居座りました。家に帰ったら記録を書かないというのが分かっていたので、喫茶店で座って、ノートを出して、机が消しゴムかすだけになったのですが、それで大体4、5ページ、思い出せる限り書いて帰ります。すると、家に帰ってもう1回見直すことができます。

あと、本当はあまりお勧めできないのですが、バスの中でも記録を書きました。だれかにのぞき込まれるとちょっとまずいので、本当はいけないと思いますが、小さなメモを持ってバスの中で記録を書きました。座ってしまうと私も仕事をしないことが分かっていたので、移動の時間というのが必ずあります。移動の時間であるとか、無理にお茶を飲みに行き、時間を作る。そうやって記録だけは書きました。

そして、機会があれば事例検討に出させていただきました。そこで2回ほど非常に高名な先生に事例を見ていただいたことがありました。その時にその先生が言ってくださったことは、その場では何も分からなかったのです。何かその先生に横にいただけでぼっとしてしまって、でも、1カ月後、ふと思いつくのです。「あ、ああ言っていたら。私はうれしかったけれども、あれは私ができていないことを先生がとても優しく教えてくれたんだ」とか、のちのちぼろぼろ出てきます。

ですから、その時の経験を基にして築いたことは何かというと、いろいろな方法をじたばたして、それでいいのだということです。役に立つものばかりに行けるという確率は非常に低いです。だから、いろいろなところに

かなりの資本投下も時間の投下もして、そして、それらがいつか少しずつまとまってくる時がある。

もう一つは、やはり時間がないとは言いながら書かなければならない。書くことでやはり自分の中で整理ができます。そしてもう一つ、やはり事例を出す機会があれば出す。その時すぐに解決法なんて絶対に分かりません。1カ月たち2カ月たち、1年たってから分かったこともあります。それを今思い起こせば学んだような気がします。

2. 実習生として学んだこと；

アメリカ留学での経験

初心者のころばかりでは次に進みませんので、アメリカ編に行きます。30になろうとしている時に、私は仕事を辞めようと思いましたが、その時まだじたばたして、この仕事は何をすればよくやったと言えるのか、どんなときに私はいい仕事をしたと言えるのか、つまり成果物が自分で全く分かりませんでした。こんな仕事よりももっと成果物が明確になる仕事に移ってやろうとかなり真剣に思って、資格を取るために勉強した時もありました。

しかし、あまり悔しかったので、もう1回だけ頑張ろうと思ったのが、その留学のきっかけでした。それでアメリカに行くことになりました。アメリカの大学で修士のプログラムに入りました。そこで私が何を学んだかという、もう徹底した実践の言語化ということでした。

クライアントにどうアプローチするか

アメリカの実践家のみながみな素晴らしく、よくできる人ではありません。ラッキーなこ

とに、私は実習先で何人ものクリニカル・ソーシャルワーカーと呼ばれる臨床ソーシャルワーカーの同席面接をさせてもらいました。時折、「えっ、これでええの？」と思う方もいらっしゃいました。でも、すごいのは徹底して言語化をしていくこと。あと、やはりできる方の人数も確かに多いです。層は厚いです。ただ、一番すごかったのは、自分がやったことを振り返って言葉にして、ほかの人たちと照らし合わせる作業を徹底する。そして、それらの実践を積み重ねていって、例えばこういうふうな課題を持ったクライアントにはこんなアプローチが有効かもしれない、というような引き出しをたくさん作っていくことでした。例えば、アルコール依存症に対して、その当時でしたら最もよく使われているというプログラムを私も教えてもらうことができました。

それからもう一つは、授業の中でいろいろな異なるアプローチを教えてもらうのです。これはソーシャルワーカーとしてすべてそのまま使えるとは限らないのですが、人間の行動や感情と試行。やっていることと、考えていることと、感情と、これらそれぞれ少しずつずれることもあります。これらをどうとらえるか。

もし、その試行や感情や行動がその人の今の生活を邪魔しているならば、どのようにして変化可能かということに関して山ほど理論があるのです。そのような理論を教えてもらいました。それを習ったからといってすぐに使えるわけではないのですが、知っていること自身がやはり自分にとって何となく自信が付きまします。「あ、このようなことは行動療法的に考えるといいのかな」と。

渡部はそんなことを言っているけれども、アメリカの話をして何の役にも立たないだろうとお思いですね。皆さん幸せなことに、私たちがテキストとして使ったこの本は日本語訳されています。アメリカでよく使われる

のが、「ソーシャルワーク・トリートメント」と言うターナーと言う人が書いた本ですが、これが1999年中央法規出版から同じタイトル「ソーシャルワーク・トリートメント」、副題が日本語で「相互連結理論アプローチ」として上・下2巻で出ております。北星学園大学の米本先生が訳していらっしゃいます。

これを見ると、「ああ、こんなふうな考え方もあるんだ」ということが分かると思います。そういうものを習いました。幸せなことに日本でもあります。私が最後に皆さんにぜひお勧めしたいと思ったことを先に言ってしまうのですが、無駄になるかも分からないけれども、いろいろな本をばらばらと見ていただきたいのです。いつか自分にぴったり来るものが見つかります。断片が少しずつまとまっていくことがあります。

ソーシャルワークの評価について

それから2番目です。私は1982年に留学したのですが、アメリカの留学で学んだことのもう一つは、当時ちょうどアメリカのソーシャルワークの大学院で大きな変革が行われていました。何かというと、もう10年以上前からソーシャルワークであるとか、臨床心理であるというようなゴールが曖昧であったり、その結果の評価が難しい領域に関して、政府がお金を出すことを渋ってきたのです。「あなたたちがやっていることが本当に役に立っているのか。役に立っていないのではないか。あなたたちがそこで面接をしたり、介入をしなくても、ある一定の年月がたてば変わってきているのではないか」ということが言われ、この議論が経費削減に利用されそうになりました。

そこで起こってきたのが評価研究の波でした。評価研究というのが非常に盛んになりまして、ソーシャルワークの領域でもいっぱいやられるようになりました。皆さんが実践な

さるとき、この当時まず確実に要求されたのがしっかりしたアセスメントです。アセスメントを基にしてどんなゴールを立てたか。これは「プロセスゴール」と言いますが、そのゴールに至る途中経過にどんなゴールを作ったか。最終ゴールをどうやって測定したのか。測定した結果どうであったか、これが問われました。

これを聞いて皆さんはどうお思いになるのでしょうか。そんなに簡単に測定できるとお思いでしょうか。それとも「うんうん、できるよね」とお思いでしょうか。これは両方とも半々なのです。私自身授業の一環として出た宿題に、この評価研究で家族療法の測定というのをやってみたのです。一番多かった論文は行動療法でした。ご存じの方は、すみません、私あまり簡単に言い過ぎていたら許してください。行動療法というのは人の行動変容を目指しているもので、例えば自閉症のお子さんに対するアプローチであっても、その子がどうなるかというのは非常に明確に行動レベルで決めます。

例えば、リンゴという言葉が言えるようになるとか、緑の信号で止まるとか、そういうことを作ってしまうわけです。それを少しずつ行動を作っていく、変えていく。すると、評価研究でもやはりすごくたくさん論文が出ていました。成功したよというのもいっぱいあったのです。

家族療法なんかを見ると、あまりに複雑で本当に少ない。あっても測れる部分はその一部なのです。家族が幸せになったとかというのではないのです。家族の中の夫と妻がいさかいする数が減ったとか。いさかいする数が減ったからその人たちの最終的な幸せがどうなったかというのはまた別問題です。

それをたくさん読んでいるうちに二つのことに気が付きました。評価するということによって私たちソーシャルワーカーが学んだのは、やはりしっかりとアセスメントをし、自

分が何を目標しているのかを明確にすること、言葉にすることの重要性。ただし、何でもかんでも測定できるわけではない。単純ですけれども、この二つだったのです。

一見成功したように見せかけるケースもできるのです。私が成功しそうなものだけをゴールにすればいいのです。そして、それを測りました。はい、私は100個のケースをしましたが、90で成功しました。しかし、そこで測ったものが、その100のケースのそれぞれそこに生きている皆さんにとってどれだけのものかを測っていなければ本当の意味では役に立たないことが、実践している皆さんはよくお分かりだと思います。

ただし、この二つのことを私たちは常に考えておかなければならないということを知りました。ここでもやはり鍵は徹底した文章化、言語化です。私はこの方をどのように見立てたか。それを基にしてどんなアプローチをしたか。その結果どんなことが起こってきたか。だから、どんなふうに修正を掛けたか。これは今よくケアマネジメントで言われているアセスメント、援助計画を立てる、そしてモニタリングという辺り、みんな一緒なのです。ということでした。

アメリカでの実習経験

次が実習編ですが、実はここをお話すると、皆さんが「いいわね、アメリカはスーパーバイザーがいて」とか、「いいわね、アメリカは」とかおっしゃると思いますが、実はアメリカでももちろんスーパービジョンがシステムとして確立されてはいるのですが、実習に出る学生がみんないいスーパーバイザーに付くとは保証の限りではないのです。

私が大学院生だった時、「いい実習先に行けて、いいスーパーバイザーに付けたら、もう授業料の元は取ったと思え」と言われるぐらいまれなことでした。私はとても恵まれて

いたのです。恵まれた人の話を聞いても、「じゃ、そうでない人はどうなるの」と、またこの話をしますが、そこで実習で何があったかという、ここでも記録です。

私がどんな指導していただいたかという、クライアントの許可を取って面接を録音させてもらいます。この時には、必ずこれは消すものである。何のために行くかという、私自身実習生だということをクライアントにきちんと言います。クライアントも知っています。私はあなたにとって役に立つソーシャルワーカーになるために、自分が困ったときには指導を受けています。そのために取らせてください。「ノー」と言われたらもちろん取りません。「イエス」と言われたら取ります。

私のスーパーバイザーは素晴らしい人で、そこで取った録音テープを毎週聞いてくれるのです。それで次の週になると指導してくれます。彼女は徹底したサポーター、非常に支持的なスーパーバイザーでした。私は彼女を含めて何人かのスーパーバイザーに出会ったのですが、彼女が一番正直に自分の欠点を言っています。

正直な話、そのあといろいろな方にも出会いました。最初から何か怒られそうなスーパーバイザーがいるのです。批判的な人もいます。すると、もう「ごめんなさい」から始まるのです。「すみません、ここができていません。来週これを変えようと思います」と行きます。すると怒られませんから。

でも、私自身はあまり進歩しないのです。もう分かっているから、そこでのやり取りはあまりないのです。怒られないように気を付けます。ですから、皆さんがスーパーバイザーであれば、これはスーパーバイザーも知っている。怒られると分かれば、怒られないように記録を書いてきます。

それで、こんなふうに私は徹底的にまた書くこと、それから支持的に指導してもらうことの意味を知りました。あともう一つ良かつ

たなと思うのは、やはり先程の引き出し作りです。のちのち私の職場にもなるのですが、私が行っていた実習先は、ピアスーパービジョンと呼ばれる、同僚間でのスーパービジョンを非常に早い時期に実践をした珍しい機関でした。

自分のスーパーバイザーがいなくても、同僚間でそれぞれが仕事を吟味し合う、検討し合うということをしました。その中でいろいろな方の異なるアセスメントも聞かせてもらうことができました。そのためには私は記録を書かなければならない。フェースシートはアセスメントの項目、援助計画の項目、ゴールの項目、そして何回ぐらいのセッションで終わると思うか、あなたが何回セッションをすればどの辺りまで到達できると思うかというのが、裏表1枚ですが、びっしり書かれています。これを英語で書かなければいけなかったのが私にとっては至難の業でした。本当はしてはいけませんが、私はフェースシートを持ち出しました。家に帰って、当時ワープロがなかったので鉛筆で書いて、消しゴムで消して校正して、上からボールペンで書いて持って帰るのです。

最初是一个のケースを書くのに3時間から5時間かかりました。ただ、たくさんやっていると、苦手な言葉でもだんだん速くなります。皆さんが記録を書くのが嫌だなお思いでしたら、最初はつらいけれども、とにかく書いてください。どんどん速くなります。このことを徹底的にやられました。というのが事例を書くということでした。

3. ソーシャルワークの知識と

理論； 教育者の立場から

そして、そののち私は大学院で指導するといえますか、教える立場になりました。そこ

ではソーシャルワーカーの養成プログラム。教えた経験から、まず知識をどんなかたちで伝達することができたか。その時の難しさは何であったか。それから面接力とは、どんなふうに伝達することができたか。そこでみながつぶかる問題は何かについて簡単にお話を致します。

知識に関しては先程お話ししましたが、ターナーのようないろいろなアプローチ、それからソーシャルワーカーとは一つの役割だけではなく、先程皆さんにお話をしましたように、こんなにいろいろな役割があるのだということ。例えばネットワークャーとしてはどんなことができるか、教育者としてはというふうなプログラムをたくさん学びます。これが即使えるわけではないのですが、自分の中に引き出しができるということで、学生たちも非常に安心していきます。

ですから、皆さんもほかの方が実践している方法などをぜひ聞いてみて、そして自分で身に着けていっていただきたいと思ひます。アドボケーター、代弁者としての役割はこんなふうにできるのだということをやります。

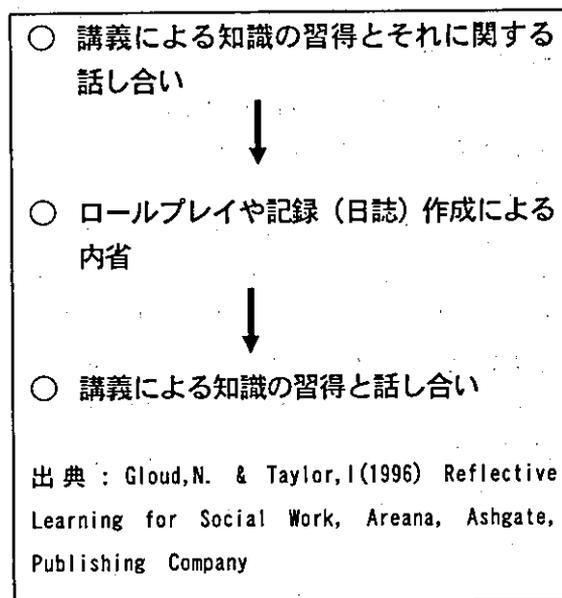
それから次に私が自分のテキストに書いた「ソーシャルサポートの理論」というのを入れたのですが、これは一見ソーシャルワークの授業とは直接は関係しないようですが、心理学の領域で1970年、80年に大ブームを引き起こしたソーシャルサポートという研究のまとめです。

ところが、こういう中に私たちのソーシャルワーク実践を支えてくれる理論がたくさんあります。こういう勉強をすることで自分がやっていることの意味をもう一度問い直すことができるのです。ですから、決して無駄な勉強はないということをお伝えしたいと思ひます。

3段階学習の方法

そして、大学の授業でやってきたことはまさにこれにはまるなと思ひたことがあります。3段階学習です(図表3)。

図表3 3段階学習



これはゴールドとテラーと言う人が1996年に書かれた「リフレクティブラーニング・フォー・ソーシャルワーク」と言うテキストの中の一部を私が簡単にしたのですが、私たちが臨床家として臨床のソーシャルワークをするときに必要なステップはこんなものだろうと彼らは言っています。

まずは、もちろん知識がなければならない。講義によって基本的な知識をまずは習得するのである。そして、知識はただ聞いただけでは駄目で、自分のものにするためにグループディスカッションなり何かの話し合いで、「今、渡部が言っていたソーシャルサポートって何なの」ということを話し合う。これで自分の中にちょっと深めるわけです。

そして次は、今度は体を通して実際にそれを使ってみる。ロールプレイ、実際にクライアントに使うとあまりにも危険が大きすぎま

す。一番やりやすいのがロールプレイという方法です。ロールプレイや記録、自分が実践しているとき、クライアントの方に対して私が実際にこれをやってみたらこうなったのだよという日誌を書きます。

そして、今度はそれをもう1回持ち寄って、自分が経験したと講義とを擦り合わせながら聞いて話し合いをする。こうして知識が経験に結び付けられ、また、経験が知識に戻っていくというふうな循環が起こります。このことをアメリカのソーシャルワークの教育ではしっかりとやりました。

ここで皆さんに私がお勧めできることはロールプレイの効用です。ロールプレイというのは、同僚同士でもいいですし、先輩と後輩でも結構です。だれとでもできます。何がいいかというと、自分がソーシャルワーカーの役割を執ることだけに意味があるのではなく、実はクライアントの役割を執ることにすごく意味があります。

今日オープニングで皆さんにご紹介したエミリーさんのケース、これも彼女が分かってくれた理由は、私たちがロールプレイをしたからだと思います。エミリーさん自身がそのクライアントの男性の役割をしてみ、自分がいつも行って「嫌だな、しゃべってくれないで」と思っているのとは今度逆に、「嫌だな、知らないきれいな女の子が来て」という気持ちを体験した。

先程も申しましたように、私たちはいろいろな人生を体験することはできません。それを補うものが書物であり、視覚的に学べるものであったり、もう一つはロールプレイ、自分が経験していない世界をこういうものなのだろうかと考えながらやってみることで。

私もよくロールプレイをやるのですが、最初は皆さんはとて嫌がられます。ただ、いいソーシャルワーカーはとて一生懸命やってくさるし、とてお上手です。ですから、ロールプレイでそんな恥ずかしい遊びみたい

なことはしたくないとおっしゃらないでやっていただきたい。

ただ、ロールプレイをするとき気を付けないと遊びになります。決して遊ばないでほしいのです。そのためには、クライアントはどんな人かをしっかりと書いて持ってきて、それを使ったロールプレイを、是非していただきたいです。ですから、ご自分が困っているケースをしっかりと記述したものを自分が持って、この人がこんなことを聞かれたらこう答えるだろう、ああ答えるだろうということが分かってやっていただきたい。できればそれをビデオなり録音なりして振り返っていただきたいということです。

そのほかは、私が何を考えたかという、やはり先程の3段階学習に尽きるのですが、毎週学校で講義して勉強したことを、自分の現場に持って帰って試してもらうことでした。

さらに、その現場での体験を持ち寄って、クラスでディスカッションする方法を採りました。これは学校のプログラムですが、同じようなことを皆さんが、たとえ独り職場であってもほかに仲間を作って、その人たちと行うことはできると思います。

ただ実践だけを書いているだけでは、やはり限界が来ます。ですから、その実践をもう一度見直してみるときに、どんな知識を基にこの実践を見直すかというのを考えていただきたい。その方法としては、先程言いましたターナーの本でも、それからほか、いっぱいソーシャルワークの理論などの本が出ています。見ていただきたい。

あとは、実習現場での実践の評価研究をアメリカでは非常に重視されました。ですから、自分がやったことをもう1回、理論や知識に戻していく努力です。もう既にだれかが言っていないなくても、ひよっとしたら皆さんが新しい実践方法を見つけ出すことだってあります。何でもかんでもだれかがやっているわけではなく、私はこのような利用者の方を何人も何

人もやって来て、何かちょっと確信みたいなのが見えてきた。すると、皆さんが今度は、新しいアプローチの仕方の秘密のようなものを見つけることもできます。ですから、書く。そこから何かの概念化抽出をするということがとても大事だと思いました。

ビデオ教材を使った面接の学習

これから、私が日本で研修をしながら気付いたことをお話ししようと思ったのですが、実は日本の研修に当たって、今日、後ろに来てくださっています奥川幸子さんと一緒に『面接への招待』（中央法規出版）と言うビデオを作成致しました。

皆さんからのお声を聞かせていただいで一番多いのが、「スーパーバイザーなんていないわよ。どこにいるのよ」と、「そんな理想みたいなこと言ったって、渡部はアメリカに行ったんだろう。私はアメリカに行く期間もなければ、お金もない」とおっしゃいます。私もお金がなくて行きました。人はいない。どうすればいいんだ。教科書もない。

そのうちの一つ、そういうことを分かって、奥川さんと私でビデオを作りました。これは長時間なので皆さんに全部はお見せしません。一部を見ていただいて、視覚的な情報が入ることがどんな意味を持つか。それから、ここまでは今日、ちょっと時間が短かすぎるので分かっていただけないと思うのですが、良いロールモデルになる人を見ておくことによって、そこから自分がいくつも引いてこられる基本的な知識があるということを見ていただきたいと思います。

実は、これはほとんど奥川さんが作ってくださって、私は解説をした程度ですが、ここに出てきたソーシャルワーカーのモデルとなるソーシャルワーカーを見ていくと、私がアメリカで学んだ基本をほとんど全部押さえています。ですから、いい仕事というのは、基

本を全部押さえているということを再確認しました。

そこれまで本日見てはいただけないのですが、はじめに、このビデオで作った失敗例をやっています。私たちは上手なだけを見て、「あんな関係ないよな。できないよな」で終わりますよね。そこで、「ちょっとこんなことを皆さんもやったことはありませんか。気付いたことはありませんか」ということで、まず自分自身が見て、「こういう面接しないほうがいいよな」ということに気付くための面接も出しています。このビデオでは、山手君という新人ソーシャルワーカーの失敗面接が出てきます。

これを見て、「ああ、ここかな」とか、「これかな」と見ていただけるとうれしいです。すみません、これを見て「うん、山手君って立派だよな」ともしお思いになったら、帰ってもう1回、基本のテキストを読んでいただきたいと切に思います。

そのあとで、モデルとなるような素晴らしい面接を見ていただきます。この違いがもしお分かりいただけましたら、とてもうれしいです。ですから、視聴覚教材の効用ということ、それから他人がやっている仕事を見て、それに対して自分がきちんとコメントができることの意味というのを見ていただこうと思います。

ビデオ後半に出てくる近藤ソーシャルワーカーの事例を見ていただくと、実は私、これを見るたびに、またいろいろ新しいことを発見するのですが、今ここに秘められていたいくつかのキーワードを上げます。

まず、面接のプロセスを適切に踏んでいる。最初に、まず主訴を明確にしていく問題探求。それから今度は、ある程度の面接、電話、インタビューですけども、仮アセスメントから仮ゴール設定をある程度やります。それに沿って近藤ソーシャルワーカーは面接を進めています。しかし、1人で進めてはけません。そ